

第二言語学習者の語彙カテゴリー化の習得に関する研究の概観

洪 春子*

A Review of the Researches on L2 Learners' Acquisition of Lexical Categorization

HONG Chunzi

Abstract

This study surveyed researches on L2 learners' acquisition of lexical categorization to find whether the L1, word class and the complexity of the L1 and L2 lexical categorization influence the acquisition of lexical categorization in L2. The results showed that L1 influence the acquisition of lexical categorization in L2; nouns are easier to acquire than verbs; the complexity of the L1 and L2 lexical categorization had no influence on the L2 learners' acquisition of nouns, while it influences the acquisition of verbs, when the lexical categorization of L2 is more complex than the L1, so that the reconstruction of L2 lexical categorization becomes more challenging. However, almost all of the studies experimented on L2 learners who are high proficiency learners of L2, and most of the studies investigated the L2 learners of English. Based on the results above, further research on L2 learners with different proficiency and L2 learners' of other languages are proposed.

Keywords : second language acquisition, lexicon, word learning, word meaning, lexical categorization

1. はじめに

言語間の語彙の意味関係はほとんどの場合、一対一の対応関係ではない。言語間で一対一の語意の対応関係が成り立ちにくい原因は、各言語の言葉で物事を区別する仕方（すなわち語彙カテゴリー化）は完全に一致することではなく、言語によって異なるからである（Bowerman, 2005; Majid, Boster & Bowerman, 2008など）。

例えば、「人が物を持つ」動作において、英語では移動の有無によって、「hold」と「carry」を使い分けるが、中国語では、物を「持つ」身体部位などによって、13の語で使い分けをする（佐治, 梶田 & 今井, 2010）。このような言語間の語彙カテゴリー化の違いによって、言語間の言葉が指す意味範囲はほとんどの場合一致しない。

Langacker (1987, 2000) は「(動的) 用法基盤モデル」を提唱し、言語習得がダイナミックなカテゴリー化の習得プロセスであるとした。その考えに基づけば、第二言語（以下L2）習得における語彙をはじめとした言語の習得はカテゴリー化の再構築のプロセスであると言える。しかし、L2学習者にとって、すでに形成された母語（以下L1）の語彙カテゴリー化からL2の語彙カテゴリー化へ再構築することはかなり困難である（Saji & Imai, 2013; Gullberg, 2009など）。

L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関して、これまで様々な言語を対象にした実証研究が行われてきた。しかし、L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に影響を与える要因は何かという問題に対しては、まだ十分に検

キーワード：第二言語習得、語彙、語の習得、語の意味、語彙カテゴリー化

*平成29年度生 比較社会文化学専攻

討されていない。また、L2語彙カテゴリー化の習得に関する体系的なレビュー論文は管見の限りまだ見当たらない。そこで、本稿では、L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関するこれまでの実証研究を概観し、L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関わる影響要因を解明することを目的とする。

続いて本稿の構成であるが、まず2章では対象研究の収集方法を述べる。3章では収集した対象研究に基づいて、L2学習者の語彙カテゴリー化に関する実証研究の全体像を概観する。その後、各実証研究の結果を比較し、L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関わる影響要因を分析する。最後に、4章では、本稿のまとめと今後の課題を提示する。

2. 分析方法

本稿の分析対象研究は、語彙習得研究が盛んになり始めた1990年から2017年の間に刊行されたL2学習者の語彙カテゴリー化に関する実証研究である。対象論文を収集するプロセスは以下の通りである。

1) キーワードを決め、データベースで検索し、タイトルと要旨を読んで論文を選ぶ。

まず、英語の論文に関しては、論文データベースERIC、EBSCO host、PsycINFOで、「lexical categorization」、 「semantic categorization」、 「second language categorization」の3つのキーワードで検索した。日本語の論文に関しては、論文データベースCiNiiで英語と同じキーワード「語彙 カテゴリー化」、「意味 カテゴリー化」、「第二言語 カテゴリー化」で検索した。しかし、これらのキーワードで検索した結果、対象文献が見つからなかったため、キーワードを「第二言語 語彙」、「第二言語 語意」、「L2習得 語彙」、「L2習得 語意」に変えて、再検索した。

2) 選んだ論文の内容を確認し、対象外の論文を除外する。

3) 選ばれた論文の参考文献と被引用論文の中から、関連する論文をさらに探し追加する。

4) そして、3)の作業で見つかった論文に対して、もう一度2)と3)の作業を行い、参考文献と引用された論文の中から、関連する論文を探す作業を繰り返す。

5) 最後に、1)～4)で選ばれた論文に対し、さらに以下の3つの選別基準に沿って選別し、対象文献を決める。

1) 内容が語彙カテゴリー化に関する研究である。

2) 対象者がL2学習者で、学習開始年齢が幼児期（目安として6歳）以降である。

3) 実験方法が言語的な実験である。

3. 結果及び考察

基準を満たした論文は計12本である。表1は論文の一覧表である。研究3と4、および研究6、7、8は、L2学習者の言語的な実験の部分について同様のデータを使用している¹⁾。

3.1 L2学習者の語彙カテゴリー化に関する実証研究の全体像

ここでは、12本の論文からL2学習者の語彙カテゴリー化に関する実証研究を概観する。

まず、L2学習者の語彙カテゴリー化に関する実証研究の数（12本）から考えると、これに関する研究はまだ少ないことがわかる。

次に、「NNSのレベル」においては、上級レベルが多い。なお、研究6、7、8では、レベルを明確に報告していないため表1には記載していないが、佐治（2011）では、「対象者である中国語L2学習者は、日常的なコミュニケーション及び大学の講義等では問題なく中国語を運用できるレベルである」と述べているため、上級レベルに近いと考えられる。

また、「研究方法」においては、ほとんどの研究では「口頭産出」という産出実験が用いられているが、「典型度判断、受容性判断」のような理解実験はあまり行われていない。

そして、「対象語」においては、「うつわ、置く、持つ、切る・壊す」のような多様な意味領域に関し研究が行われている。

表1 L2語彙カテゴリー化の習得に関する研究

研究	NNSレベル	研究方法	対象語	言語
1 Malt & Sloman (2003)	初級～上級	口頭産出、典型度判断、命名ストラテジー、熟知度	うつわ	L1中、西、韓、タイなど L2 英
2 Malt et al. (2015)	上級	口頭産出	うつわ	L1中 L2英
3 Zinszer (2014)	上級	口頭産出	うつわ	L1中 L2英
4 Zinszer et al. (2014)	上級	口頭産出	うつわ	L1中 L2英
5 Malt & Lebkuecher (2016)	上級	名称選択	うつわ	L1中 L2英
6 佐治他 (2010)				
7 佐治 (2011)	—	口頭産出	持つ	L1日、韓 L2中
8 Saji & Imai (2013)				
9 綱井 (2014)	上級	口頭産出 受容性判断	切る・壊す	L1日 L2英
10 薛 (2015)	上級	口頭産出	切る・壊す	L1韓 L2日
11 Cadierno et al. (2016)	中級	口頭産出	置く	L1/L2蘭、西
12 Gullberg (2009)	中級～中上級	口頭産出	置く	L1蘭 L2英

注：イタリック体の研究は「博士論文」である。NNS：L2学習者。

最後に、「言語」においては、これまでの研究の特徴として、学習者のL2が英語である研究が過半数を占め、英語以外の言語に関する習得研究はまだ少ないことが窺える。

3.2 L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関わる影響要因

続いて本節では、各研究の研究結果を比較することを通して、L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関わる影響要因を分析する。各研究の研究結果を比較するためには、同じような分析手法を用いたデータである必要がある。表1の12本の研究の分析手法と統計分析の結果を確認した結果、大多数の研究で報告されている対象者間の語彙カテゴリー化の類似度（グループ内の個人差を考慮しない相関係数）を比較データに選定した²。その結果、研究1、研究11、研究12はこの比較データがないため、分析対象から削除した。また、研究1と研究12は、対象者において、学習者にとってのL1を母語とする母語話者（以下L1母語話者）と、学習者にとってのL2を母語とする母語話者（以下L2母語話者）のデータがないこともこれらを分析対象から排除するもう一つの理由である。

そして、研究3と4、研究6、7と8のデータは同じである（学位論文と査読付き論文のデータが同じであるため）。同じデータが用いられた論文の中から分析手法などにおける信頼性がより高いと思われる最新の査読付き論文（研究4、8）を選定した。

最終的に、表2に「*」が付いている6本の研究を分析対象研究とした。

本稿での分析対象研究の学習者はほとんど上級学習者であるため、学習者のレベルによる影響は分析対象外とする。

表2 L2学習者の語彙カテゴリー化の習得に関わる影響要因の分析対象研究の選定

研究	比較 データ	対象者			
		L1NS	L2NS	NNS	NNSレベル
1 Malt & Sloman (2003)	×	×	○	○	初級～上級
2 Malt et al. (2015) *	○	○	○	○	上級
3 Zinszer (2014)	○	○	○	○	上級
4 Zinszer et al. (2014) *					
5 Malt & Lebkuecher (2016) *	○	○	○	○	上級
6 佐治他 (2010)	○	○	○	○	—
7 佐治 (2011)					
8 Saji & Imai (2013) *					
9 綱井 (2014) *	○	○	○	○	上級
10 薛 (2015) *	○	○	○	○	上級
11 Cadierno et al. (2016)	×	○	○	○	中級
12 Gullberg (2009)	×	×	×	○	中級～中上級

注：イタリック体の研究は「博士論文」である。NS：母語話者。NNS：L2学習者。

3.2.1 L1の影響

L2語彙カテゴリー化を習得する際、L2学習者はすでに形成されたL1の語彙カテゴリー化の方法をL2語彙カテゴリー化の方法へと再構築を行う必要があるが、学習者はL1の影響を受け、L2の語彙カテゴリー化においてもL1の語彙カテゴリー化の仕方をそのまま用いると報告されている (Saji & Imai, 2013; 綱井, 2014など)。

本節では、各研究において、L2語彙カテゴリー化の習得にL1語彙カテゴリー化の影響が見られるか、見られるとしたらどの程度影響されるかを分析する。

表3の右から1列目「L2NNSとL1NSの比較」は、L2学習者のL2語彙カテゴリー化とL1母語話者のL1語彙カテゴリー化の相関係数³を示している。相関係数が大きいほど、L2学習者のL2語彙カテゴリー化がL1母語話者のL1語彙カテゴリー化との類似度が高く、学習者はL1の語彙カテゴリー化の知識をL2にも運用していることを意味する。研究1と研究4は相関係数が0.74～0.86で、相関がかなり高い。また、研究5と研究6では、相関係数が0.35～0.53で、中程度の相関が見られた。以上より、学習者のL2語彙カテゴリー化にはL1の影響が見られ、学習者のL2語彙カテゴリー化はL1母語話者のL1語彙カテゴリー化と中～高程度に類似していて、影響が比較的大きいことが窺える。

しかし、表3の右から2列目「L2NNSとL2NSの比較」と右から1列目「L2NNSとL1NSの比較」を見ると、学習者のL2の習得状況と学習者のL1の影響の強さとは以下に説明するように、直接関係しないように見える。

表3の右から2列目「L2NNSとL2NSの比較」は、L2学習者のL2語彙カテゴリー化とL2母語話者の語彙カテゴリー化の相関係数を示している。相関係数が大きいほど、L2学習者のL2語彙カテゴリー化がL2母語話者との類似度が高く、L2習得が進んでいることを表す。

研究1では、学習者のL2語彙カテゴリー化とL2母語話者の語彙カテゴリー化の相関係数が0.77～0.81で、学習者のL2が母語話者に近づいていることがわかるが、学習者のL2語彙カテゴリー化とL1母語話者のL1語彙カテゴリー化も非常に類似しており ($r=.74 \sim .80$)、母語の影響を強く残しているという結果となっている。それに対し、研究4では、学習者のL2語彙カテゴリー化とL2母語話者の語彙カテゴリー化の相関が非常に低く ($r=.19$; $r=.25$)、学習者のL2が母語話者に近づいていないことがわかるが、学習者のL2語彙カテゴリー化とL1母語話者のL1語彙カテゴリー化が非常に類似し ($r=.81$; $r=.86$)、L1の影響を強く受けており、どちらも習得が進んでいないことを示している。つまり、研究1はL2習得は進んでいるが、L1の影響も強いという結果、研究4はL1の影響が強く、L2習得はあまりできていないという結果となっている。

要するに、学習者のL2語彙カテゴリー化の習得において、L1語彙カテゴリー化の影響をある程度受けるが、L1語彙カテゴリー化に影響される程度は学習者のL2語彙カテゴリー化の習得状況と直接関係しない可能性がある

表3 L2語彙カテゴリー化の習得におけるL1の影響

研究	NNS レベル	研究方法	対象語	NNS グループ	L2NNSと L2NSの比較	L2NNSと L1NSの比較	
1 Zinszer et al. (2014)	上級	口頭記述	うつわ 皿類	LoR無	$r = .78$	$r = .80$	
				LoR短	$r = .77$	$r = .78$	
				LoR長	$r = .81$	$r = .74$	
2 Malt et al. (2015)	上級	口頭記述	うつわ	皿類	下位群	$r = .73$	—
					上位群	$r = .82$	—
				瓶類	下位群	$r = .80$	—
					上位群	$r = .82$	—
3 Malt & Lebkuecher (2016)	上級	名称選択	うつわ	皿類	下位群	$r = .85$	—
					上位群	$r = .90$	—
				瓶類	下位群	$r = .76$	—
					上位群	$r = .75$	—
4 Saji & Imai (2013)	—	口頭記述	持つ	韓L2	$r = .25$	$r = .86$	
				日L2	$r = .19$	$r = .81$	
5 綱井 (2014)	上級	口頭記述	切る・壊す	—	$r = .42$	$r = .45$	
		受容性判断			$r = .48$	$r = .35$	
6 薛 (2015)	上級	口頭記述	切る・壊す	—	$r = .55$	$r = .53$	

注：NS：母語話者。NNS：L2学習者。LoR (Length of Residence)：学習者のL2国での滞在時間の略称。

LoR無：LoR=0; LoR短：LoR<1.3年; LoR長：LoR>1.3年。韓L2=韓国人学習者；日L2=日本人学習者。

る。もしくは、L2語彙カテゴリー化の習得に影響を与える要因が、L1の影響以外にも存在している可能性がある。

表3の右から2列目「L2NNSとL2NSの比較」と左から5列目「対象語」を見ると、対象語が「うつわ」である研究1、2と3はL2学習者とL2母語話者の相関が高い ($r = .73 \sim .90$)。これに対し、対象語が「持つ」である研究4は、L2学習者とL2母語話者の相関が低い ($r = .19 ; r = .25$)。対象語が「切る・壊す」である研究5と6は、L2学習者とL2母語話者と相関が中程度である ($r = .42 \sim .55$)。以上より、L2語彙カテゴリー化の習得は対象語の特徴に影響される可能性があると考えられる。このことから、以下では対象語の特徴に関わる影響要因について分析する。

3.2.2 対象語の品詞の影響

語彙の品詞は語彙カテゴリー化の習得に関わる要因の一つとして考えられる。Distributed Feature Model (De Groot, 1992; Van Hell & De Groot, 1998) では、具象名詞は言語間で共有する概念の度合いが高いため、他の語彙より習得されやすいと主張している。特に、動詞の場合は名詞よりさらに言語間の相違性が高く、語彙カテゴリー化が複雑である (Gentner & Boroditsky, 2001; 今井 & 針生, 2007)。しかし、L2学習者の語彙カテゴリー化の習得において、語彙の品詞の特徴が習得に影響を与えるかについては、まだ検証されていない。

そこで、本節では、各研究を研究対象語の品詞によって分類し、対象語の品詞の違いがL2学習者の語彙カテゴリー化の習得に影響を与えるかを分析する。表4はL2語彙カテゴリー化の習得における対象語の品詞の影響を示したものである。

表4に示されているように、対象語が名詞（ここではうつわ）の場合、L2学習者とL2母語話者の間の語彙カテゴリー化の相関が高い。相関係数は0.73～0.90で、全て0.70以上（高い相関）に達している。それに対し、動詞の場合、L2学習者とL2母語話者の間の語彙カテゴリー化の相関は比較的に低い。相関係数は0.19～0.55で、全て0.69以下（低い～中程度の相関）である。

つまり、上級学習者の場合、名詞の語彙カテゴリー化の習得はかなり進んでいるが、動詞の語彙カテゴリー化の習得はまだ難しい。

そこで、L2語彙カテゴリー化の習得において、名詞（ここではうつわ）は動詞より習得されやすいことが窺える。

しかし、対象語が名詞である研究は「うつわ」に関する研究のみであるため、これだけをもって名詞全体のL2語彙カテゴリー化が動詞より易しいとは結論づけられない。

また、同じ動詞のL2語彙カテゴリー化の研究でも、研究4「持つ」と研究5、研究6「切る・壊す」の習得状況は異なる。「持つ」の習得は「切る・壊す」の習得よりさらに難しい。L2学習者にとって、「持つ」系動詞の習得が難しい原因について、Saji & Imai (2013) では、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さ（ここではL1とL2の語彙数）の違いによる影響を挙げた。L2の中国語では、13の語で、「人が物を持つ」動作を使い分けるのに対し、L1の日本語と韓国語では、それぞれ、7つの語と5つの語で使い分けをするため、L2の語彙カテゴリー化はL1より複雑で習得されにくいと述べている。しかし、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さがL2語彙カテゴリー化の習得に影響を与えるかという問題に関して、まだ十分に検証されていない。

そこで、続いては、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さの違いがL2語彙カテゴリー化の習得への影響を分析する。

表4 L2語彙カテゴリー化の習得における対象語の品詞の影響

研究	対象語	研究方法	NNS		L2NNSとL2NNSの比較
			レベル	グループ	
1 Zinszer et al. (2014)	うつわ	皿類 口頭記述	上級	LoR無	$r = .78$
				LoR短	$r = .77$
				LoR長	$r = .81$
2 Malt et al. (2015)	名詞 うつわ	皿類 瓶類 口頭記述	上級	下位群	$r = .73$
				上位群	$r = .82$
				下位群	$r = .80$
				上位群	$r = .82$
3 Malt & Lebkuecher (2016)	うつわ	皿類 瓶類 名称選択	上級	下位群	$r = .85$
				上位群	$r = .90$
				下位群	$r = .76$
				上位群	$r = .75$
4 Saji & Imai (2013)	動詞 持つ	口頭記述	—	韓L2	$r = .25$
				HL2	$r = .19$
5 綱井 (2014)	動詞 切る・壊す	口頭記述	上級	—	$r = .42$
		受容性判断			$r = .48$
6 薛 (2015)	動詞 切る・壊す	口頭記述	上級	—	$r = .55$

注：NS：母語話者。NNS：L2学習者。LoR（Length of Residence）：学習者のL2国での滞在時間の略称。

LoR無：LoR=0; LoR短：LoR<1.3年; LoR長：LoR>1.3年。韓L2=韓国人学習者；HL2=日本人学習者。

3.2.3 L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さの影響

同じ意味領域に属する語彙の数は言語間で大きく異なる場合がある。L1とL2の語彙数の違いによって、L1とL2の語彙の対応関係が異なり、学習タスクも異なってくる（Pavlenko, 2009）。例えば、L1の語彙数が多く、L2の語彙数が少ない場合、L2学習者は細かく区別されているL1の語彙の意味のいくつかを融合し、より単純なカテゴリーに再編成すればよい。それに対し、L1の語彙数が少なく、L2の語彙数が多い場合、L2学習者は語彙の意味をさらに細分化して、L2の語彙カテゴリー化を習得する必要がある。L2習得において、複雑な語意システムから単純な語意システムへの習得は単純な語意システムから複雑な語意システムへの習得より容易であると考えられる（Stockwell, Brown, & Martin, 1965）。そこで、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さがL2語彙カテゴリー化の習得に影響を与えている可能性がある。

表5 L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さの影響

研究	対象語	語彙数	L1とL2の 複雑さ	研究方法	NNS グループ	L2NNSと L2NSの比較
1 Zinszer et al. (2014)	う つわ 皿 類	L1: 8 語 L2: 9 語	同程度	口頭記述	LoR無	$r = .78$
					LoR短	$r = .77$
					LoR長	$r = .81$
2 Malt et al. (2015)	名 詞 う つわ 皿 類	L1: 8 語 L2: 9 語	同程度	口頭記述	下位群	$r = .73$
					上位群	$r = .82$
			単純→ 複雑		下位群	$r = .80$
					上位群	$r = .82$
3 Malt & Lebkuecher (2016)	う つわ 皿 類	L1: 8 語 L2: 9 語	同程度	名称選択	下位群	$r = .85$
					上位群	$r = .90$
			単純→ 複雑		下位群	$r = .76$
					上位群	$r = .75$
4 Saji & Imai (2013)	動 詞 持つ	L1日: 7 語 L1韓: 5 語 L2 : 13語	単純→ 複雑	口頭記述	韓L2	$r = .25$
					日L2	$r = .19$
5 網井 (2014)	動 詞 切る・ 壊す	L1: 18語 L2: 23語	複雑→ 複雑	口頭記述	—	$r = .42$
				受容性判断	—	$r = .48$
6 薛 (2015)	動 詞 切る・ 壊す	L1: 20語 L2: 14語	複雑→ 複雑	口頭記述	—	$r = .55$

注: NS: 母語話者。NNS: L2学習者。LoR (Length of Residence): 学習者のL2国での滞在時間の略称。

LoR無: LoR=0; LoR短: LoR<1.3年; LoR長: LoR>1.3年。韓L2=韓国人L2学習者; 日L2=日本人L2学習者。

本節では、まず、各研究の学習者のL1とL2の語彙数を比較して、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さを見る。表5の「語彙数」の列では、各研究のL1とL2母語話者の語彙数をまとめた。学習者の習得への負担の大きさと、各研究の中でL1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さに関する記述を考慮し、ここでは便宜的に語彙数が10以上になる場合、その言語の語彙カテゴリー化が複雑であると見なす。

分析を厳密に行うため、「うつわ」に関する研究では、「うつわ」をさらに皿のような物（以下「皿類」）と瓶のような物（以下「瓶類」）に分けた。「皿類」におけるL1とL2の語彙数はそれぞれ8語と9語で、語彙数はほぼ同じである。それに対し、「瓶類」では、L1とL2の語彙数はそれぞれ4語と13語で、L2はL1より語を細かく使い分けている。それにも関わらず、表3の右から1列目「L2NNSとL2NSの比較」、学習者とL2母語話者の語彙カテゴリー化の類似度を表す相関係数を見ると、「皿類」は相関係数が0.73～0.90、「瓶類」は0.75～0.82であり、L2の習得状況はあまり変わらないことが窺える。このことから、「皿」でも「瓶」でも、名詞であれば、L2語彙カテゴリー化の習得に、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さはあまり影響しないことが明らかになった。

一方、動詞に関する研究においては、Saji & Imai (2013)の研究では、L2の語彙数はL1の語彙数の2倍程度で、L2がL1より語を細かく使い分けている。学習者とL2母語話者の語彙カテゴリー化の相関を見ると、韓国人中国語学習者は0.25、日本人中国語学習者は0.19で、相関は非常に低い。そこで、L1の語彙カテゴリー化が単純で、L2の語彙カテゴリー化が複雑である場合、L2語彙カテゴリー化の習得は非常に難しいことがわかる。

これに対し、「切る・壊す」系動詞を対象語にした研究5と研究6では、L1、L2とも語彙数が10以上であり、語彙カテゴリー化が複雑であることがわかる。この場合、学習者とL2母語話者の語彙カテゴリー化の間には、中程度の相関 ($r = .42 \sim .55$) がみられた。研究5と研究6の違いとして、研究5ではL2の語彙数はL1よりやや多い (L1:18語; L2:23語) が、研究6ではL2の語彙数はL1よりやや少ない (L1:20語; L2:14語)。学習者とL2母語話者の語彙カテゴリー化の相関係数は、研究5 ($r = .42 \sim .48$) が研究6 ($r = .55$) より少し低い。L2の語彙数が多い方が、習得がより難しい可能性が示唆される。

以上から、動詞のL2語彙カテゴリー化の習得においてはL1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さによる影響がみ

られ、L2がL1より語彙カテゴリー化が複雑な場合、習得が難しいことがわかった。

4. まとめと今後の課題

4.1 本研究のまとめ

本稿では、L2語彙カテゴリー化の習得に関するこれまでの実証研究を概観し、学習者のL1、語彙の品詞、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さがL2語彙カテゴリー化の習得に与える影響を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、これまでの研究を概観すると以下の点が明らかになった。

- 1) L2語彙カテゴリー化の習得研究はまだ少ない。
- 2) 対象言語については、学習者のL2が英語である研究がほとんどである。
- 3) 対象語については、動詞は多様な研究があるが、名詞は「うつわ」の研究のみである。
- 4) 研究方法については、産出実験を用いる研究が多く、理解実験は少ない。
- 5) 学習者のレベルについては、上級レベルの学習者を対象にした研究が比較的多い。

次に、学習者のL1、語彙の品詞、L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さの習得へ与える影響を分析した結果、以下の3点がわかった。

- 1) L2語彙カテゴリー化の習得はL1語彙カテゴリー化の影響を受けるが、L1語彙カテゴリー化に影響される程度は学習者のL2語彙カテゴリー化の習得状況と直接関係していない。
- 2) 品詞はL2語彙カテゴリー化の習得に影響を与える。名詞は動詞より習得されやすい。
- 3) L1とL2の語彙カテゴリー化の複雑さは、名詞の習得には影響がみられないが、動詞の習得には影響がみられた。動詞の場合、L2がL1より語彙カテゴリー化が複雑な場合、習得が難しい。

4.2 L2語彙カテゴリー化の習得研究の今後の課題

ここでは、L2語彙カテゴリー化の習得研究の今後の課題について述べる。

まず、対象言語についてはL2が英語の研究が多く、他の言語の習得研究を増やすことでL2学習者の語彙カテゴリー化の習得研究の結果をより一般化できることが期待される。

また、対象語において、名詞の研究は「うつわ」に限られており、他の名詞語彙に関するL2習得研究を増やす必要がある。

そして、対象者のレベルは「上級」がほとんどであるため、今後は異なるレベルの学習者の習得と比較することで、L2語彙カテゴリー化の習得プロセスを解明する必要がある。

【注】

1. 研究3のZinszer (2014)の博士論文では、研究4のZinszer et al. (2014)で用いられた口頭産出実験以外に、脳科学的な研究も行ったが、本稿の分析対象から外される。そのため、研究3と4の言語的な実験の部分のデータには重なりがある。また、研究7佐治 (2011)の博士論文と研究8のSaji & Imai (2013)では、L2学習者以外に、L1学習者のデータも含まれている。研究6、7と8のL2学習者の部分のデータは同じである。
2. 研究11と研究12では、対象者間の語彙カテゴリー化の類似度（以下相関係数）が報告されていない。研究1では、相関係数が報告されているが、他の研究と分析手法が異なる。他の研究では、同じ対象者グループ間の相関係数を「1」に計算している。つまり、対象者グループ内の個人差を考慮していない。しかし、研究1では同じ対象者グループ内の個人差も考慮して分析したため、同じ対象者グループ間の相関係数は「1」より低い。そのため、グループ内の個人差を考慮した相関係数はグループ内の個人差を考慮しない相関係数より低い。そこで、研究1のデータを他の研究で得られたデータと直接比較することはできない。研究2でもグループ内の個人差を考慮した相関係数が報告されているが、研究5では、研究2と研究5の結果を比較する際、研究2のグループ内の個人差を考慮しない相関係数を報告している。要するに、本稿の研究間の比較データはグループ内の個人差を考慮しない相関係数を用いた。
3. 本稿で使われた各研究の相関係数は全て5%、あるいは1%水準で有意である。

【付記】本研究は中国国家社会科学基金項目14CYY045の成果の一部である。

【謝辞】

本稿に貴重なご指導をくださったお茶の水女子大学の森山先生と西川先生に心より感謝申し上げます。

【参考文献一覧】

- Bowerman, M. (2005). Why can't you "open" a nut or "break" a cooked noodle? Learning covert object categories in action word meanings. *Building object categories in developmental time*, 209-243.
- Cadierno, T., Ibarretxe - Antuñano, I., & Hijazo - Gascón, A. (2016). Semantic categorization of placement verbs in L1 and L2 Danish and Spanish. *Language Learning*, 66(1), 191-223.
- De Groot, A.M.B. (1992) Bilingual lexical representation: A closer look at conceptual representations. In R. Frost and L. Katz (eds) *Orthography, Phonology, Morphology, and Meaning* (pp.389-412). Amsterdam: Elsevier.
- Gentner, D., & Boroditsky, L. (2001). Individuation, relativity, and early word learning. In M. Bowerman & S. C. Levinson (Eds.), *Language acquisition and conceptual development* (pp. 215-256). Cambridge:Cambridge University Press.
- Gullberg, M. (2009). Reconstructing verb meaning in a second language: How English speakers of L2 Dutch talk and gesture about placement. *Annual Review of Cognitive Linguistics*, 7(1), 221-244.
- 今井むつみ,& 針生悦子. (2007). レキシコンの構築：子どもはどのように語と概念を学んでいくのか. 岩波書店.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar: Theoretical prerequisites* (Vol. 1). Stanford university press.
- Langacker, R. W. (2010). *Grammar and conceptualization* (Vol. 14). Walter de Gruyter.
- Majid, A., Boster, J. S., & Bowerman, M. (2008). The cross-linguistic categorization of everyday events: A study of cutting and breaking. *Cognition*, 109(2), 235-250.
- Malt, B. C., & Lebkuecher, A. L. (2016). Representation and process in bilingual lexical interaction. *Bilingualism: Language and Cognition*, 1-19.
- Malt, B. C., & Sloman, S. A. (2003). Linguistic diversity and object naming by non-native speakers of English. *Bilingualism: Language and Cognition*, 6, 47-67.
- Malt, B. C., Li, P., Pavlenko, A., Zhu, H., & Ameel, E. (2015). Bidirectional lexical interaction in late immersed Mandarin-English bilinguals. *Journal of Memory and Language*, 82, 86-104.
- Pavlenko, A. (2009). Conceptual representation in the bilingual lexicon and second language vocabulary learning. *The bilingual mental lexicon: Interdisciplinary approaches*, 125-160.
- Saji, N., & Imai, M. (2013). Evolution of verb meanings in children and L2 adult learners through reorganization of an entire semantic domain: The case of Chinese carry/hold verbs. *Scientific Studies of Reading*, 17, 71-88.
- Stockwell, R. P., Bowen, J. D., & Martin, J. W. (1965). *The grammatical structures of English and Spanish*. University of Chicago Press.
- 佐治伸郎・梶田祐次・今井むつみ (2010). L2習得における類義語の使い分けの学習：複数の言葉の意味関係理解の定量的可視化の試み. *Second Language*, 9, 83-100.
- 佐治伸郎. (2011). *母語及び第二言語の習得における語意の再編成過程に関する研究* (Doctoral dissertation, 慶應義塾大学).
- 薛惠善. (2015). 韓国人日本語学習者による切断・破壊動詞の使い分けの習得. 第13回日本語教育研究集会予稿集, P30-33.
- 網井勇吾. (2014). *外国語学習者による語の意味の獲得に関する研究：英語の「壊す/切る」系動詞を例として* (Doctoral dissertation, 慶應義塾大学).
- Van Hell, J. and De Groot, A.M.B. (1998) Conceptual representation in bilingual memory: Effects of concreteness and cognate status in word association. *Bilingualism: Language and Cognition* 1,193-211.
- Zinszer, B. D., Malt, B. C., Ameel, E., & Li, P. (2014). Native-likeness in second language lexical categorization reflects individual language history and linguistic community norms. *Frontiers in Psychology*, 5, 1203.
- Zinszer, B. D. (2014). *Lexical semantic variation and cross-language interaction in categorization* (Doctoral dissertation, The Pennsylvania State University).

